

アメリカ合衆国におけるサンドマング白人難民の受容 ——「感性」の働きと1793年における難民支援活動の考察

天 野 由 莉

Summary

This article is about American attitude toward white refugees from Saint Domingue during the early years of the Haitian Revolution. It focuses on the charity project taken place in 1793. In the summer of that year, about 15000 refugees rushed into American cities because of the turmoil of the capital of Saint Domingue.

This article pays special attention to the surge of interest in “sensibility” during the 18th century. The term sensibility denoted an innate susceptibility to others’ suffering. This article shows how the pitiful state of the refugees appealed to Americans’ sensibility. American newspapers at that time depicted the situation of the distressed refugees sentimentally. In result, the slave rebellion which was going on in Saint Domingue was drained of political implications and perceived as a mere tragedy. This transition resulted in three outcomes.

First, white Saint Domingueans, who had been blamed for the devastation of Saint Domingue, were suddenly victimized after the summer of 1793 and gained Americans’ sympathy. Second, shared compassion and the relief project toward refugees appealed to patriotic sentiment in American society. Third, shared sensibility toward refugees’ plight made the federal government assist voluntary associations under public funding, regardless of the French officials’ objection.

However, sensibility toward the whites’ suffering obscured the cause of the slaves who stood up for their freedom in Saint Domingue. Thus, this article offers a nuanced explanation of the Americans’ disregard of the revolutionary meaning of the Haitian Revolution in its early stage.

はじめに

1791年、フランス領植民地サンドマングで勃発した奴隷蜂起は、後にハイチ革命と呼ばれる出来事の契機となった。十余年に及ぶ複雑で熾烈な闘争を経て勝ち取られた黒人共和国の独立(1804)は、先駆的な奴隷解放・独立の例として世界史的重要性を有している。サンドマングの奴隷蜂起は、同時代のアメリカ合衆国において、高い関心を集めた。その理由を、ここでは以下の三点にまとめた。

第一に、サンドマングと合衆国の間では活発な交易が行われていた。合衆国は1780年代から90年代にかけて、サンドマングで生産された砂糖、コーヒーのほぼ全てを輸入していた。さらに、食料自給率の低いサンドマングは食料の殆どを合衆国から輸入していた。¹⁾

¹⁾ John H. Coatsworth, “American Trade with European Colonies in the Caribbean and South America, 1790- 1812,” *The William and Mary Quarterly* 24, no. 2 (April, 1967): 245.

こうした交易上の利益に着目した外交史研究は、サンドマンクの奴隷蜂起が合衆国の外交政策に衝撃を与えたことを明らかにしている。²⁾ 近年では、J. アダムズ (John Adams) とトゥサン・ルーベルチュール (Toussaint Louverture) の間で結ばれた通商条約 (1798) に象徴されるフェデラリスト政権の「カラブラインドで現実主義的な外交政策」にも関心が集まっている。³⁾

第二に、サンドマンクにおける奴隷蜂起の動向は、合衆国の奴隷所有者にとって、重要な関心事となった。奴隷蜂起がやがて国内の奴隷に波及することが懸念されたからである。サンドマンクの奴隷蜂起が合衆国国内の人種秩序に与えた衝撃に関しては、黒人史・奴隷制研究の分野で活発な研究が進められている。⁴⁾ なかでもサンドマンクから流入する黒人難民が奴隷州にもたらした脅威について、多くの研究者が関心を寄せている。⁵⁾

本稿が特に注目するのは、第三点目である。すなわち、サンドマンクの奴隷蜂起は通商上の損益や人種秩序の動揺だけに収斂され得ない、内面的な衝撃をもたらした。サンドマンクを襲った惨禍を伝える新聞記事は、奴隷による白人家族の殺傷や放火がもたらした恐怖を、劇的な修辞を用いて紹介した。これらの記事は、非道な暴力にさらされている白人の惨状を生々しく伝え、読み物としても高い人気を博した。サンドマンクの奴隷蜂起は、その非日常的な残虐さゆえに、当時の人々の感性 (sensitivity) を揺るがす魅力的な題材となったのである。⁶⁾ したがって、サンドマンクの奴隷蜂起は交易に携わる商人や奴隷州の住人に限らず、広い階層・地域の住人の感性に衝撃を与えた。特に、1793年サンドマンクの首都カップフランセで大火が発生すると、約15000人の難民が合衆国に押し寄せ、⁷⁾ 彼らの惨状に対する同情が広く共有された。彼らはボストンからチャールストンに至る

²⁾ Rayford W. Logan, *The Diplomatic Relations of the United States with Haiti, 1776-1891* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1941); Alexander DeConde, *Entangling Alliance: Politics & Diplomacy under George Washington* (Durham: Duke University Press, 1958).

³⁾ 肥後本芳男「環大西洋革命とジェファソンの「自由の帝国」」常松洋・肥後本芳男・中野耕太郎 編『アメリカ合衆国の形成と政治文化—建国から第一次世界大戦まで』(昭和堂、2010年)、17頁; Douglas R. Egerton, “The Empire of Liberty Reconsidered,” in *The Revolution of 1800: Democracy, Race, and the New Republic*, ed. James Horn, Jan Ellen Lewis, and Peter S. Onuf (Charlottesville: University of Virginia Press, 2002), 309-29; Gordon S. Brown, *Toussaint’s Clause: the Founding Fathers and the Haitian Revolution* (Jackson: University Press of Mississippi, 2005).

⁴⁾ Winthrop D. Jordan, *White over Black: American Attitudes toward the Negro, 1550-1812* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1968); Alfred N. Hunt, *Haiti’s Influence on Antebellum America: Slumbering Volcano in the Caribbean* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1988).

⁵⁾ James Sidbury, “Saint Domingue in Virginia: Ideology, Local Meanings, and Resistance to Slavery, 1790-1800,” *The Journal of Southern History* 63, no. 3 (1997): 531-52; Robert Alderson, “Charleston’s Rumored Slave Revolt of 1793,” in *The Impact of the Haitian Revolution in the Atlantic World*, ed. David P. Geggus (Columbia: University of South Carolina Press, 2001), 93-111.

⁶⁾ 18世紀アングロアメリカ文化において、他者の痛みや暴力の描写が読み物として関心を集めたことについて Karen Halttunen, “Humanitarianism and the Pornography of Pain in Anglo-American Culture,” *The American Historical Review* 100, no.2 (1995): 309-10.

⁷⁾ John Davies, “Class, Culture, and Color: Black Saint-Dominguan Refugees and African-American Communities in the Early Republic” (PhD. diss., University of Delaware, 2008), 45.

ほぼ全ての港に流入し、各地で住民による自発的な支援活動を喚起した。⁸⁾ サンドマング難民に対する支援は、出版物を介して積極的に呼びかけられ、合衆国建国以来初めての全国的な慈善プロジェクトに発展した。

本稿では、93年に流入したサンドマング難民に対する支援活動を考察することで、初期共和国時代のアメリカ社会がサンドマングの白人層が置かれている惨状をどのように受容したのかを分析する。その際「感性」の働きに着目した近年の歴史研究の議論を援用する。⁹⁾

「感性」とは、18世紀後半、急速に重視されるようになった言葉で、道徳的判断の準拠となる感情、より具体的には、他者の苦しみに対する優れた感受性を意味した。¹⁰⁾ この時期、①神との関係を絶対視するのではなく、他者との関係の中に神意を実現することを重視する宗教観の台頭¹¹⁾ ②肉体的苦痛を軽減しようとする新たな意識の発現¹²⁾ ③他者への共感能力を市民社会の倫理の基礎に位置付ける道徳哲学の登場¹³⁾ などによって、他者の痛みに対して共感的な人間の類型が生み出された。¹⁴⁾ 当時の小説の多くは、様々な社会的病弊や災害、不運に苦しめられる人間の姿を同情的に描き、他者の苦痛に共感する「感性」の具有を自負する人々の嗜好を満たしていった。¹⁵⁾

⁸⁾ 当時の新聞の記録から、難民を迎えた都市は、ボストン、フィラデルフィア、ボルティモア、ノーフォーク、チャールストンなど多地域にわたっていたことが分かる。*Columbian Centinel* (Boston), July 20, 1793; *ibid*, August 3, 1793; *Virginia Chronicle* (Norfolk), July 13, 1793; *City Gazette and Daily Advertiser* (Charleston), July 13, 1793.

⁹⁾ 最も重要な研究は、Sarah Knott, *Sensibility and the American Revolution* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2009). 同様の関心に基づく18世紀イギリスに関する重要な文献としてG. J. Barker-Benfield, *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain* (Chicago: The University of Chicago Press, 1992); Markman Ellis, *The Politics of Sensibility: Race, Gender and Commerce in the Sentimental Novel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996).

¹⁰⁾ Janet Todd, *Sensibility: an Introduction* (London: Methuen, 1986), 6-9.

¹¹⁾ R. S. Crane, "Suggestions toward a Genealogy of the 'Man of Feeling'," *Journal of English Literary History* 1, no. 3 (1934): 205-30.

¹²⁾ Barker-Benfield, *The Culture of Sensibility*, 65-70; Elizabeth B. Clark, "'The Sacred Rights of the Weak': Pain, Sympathy, and the Culture of Individual Rights in Antebellum America," *The Journal of American History* 82, no. 2 (1995): 470-75. 伝統的にキリスト教では、肉体的苦痛をキリストの受難に象徴される贖いへのプロセスとして、あるいは神が罪あるものに下した懲罰として捉え、命あるものが甘受すべきものと位置づけてきた。デイヴィッド・B. モリス著、渡邊勉・鈴木牧彦訳『痛み of 文化史』(紀伊國屋書店、1998年)、222-33頁。

¹³⁾ Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, ed. D. D. Raphael and A. L. Macfie (New York: Oxford University Press, 1976).

¹⁴⁾ Norman S. Fiering, "Irresistible Compassion: an Aspect of Eighteenth-Century Sympathy and Humanitarianism," *Journal of the History of Ideas* 37, no. 2 (1976): 195-218.

¹⁵⁾ Knott, *Sensibility and the American Revolution*, 10-11; Julia A. Stern, *The Plight of Feeling: Sympathy and Dissent in the Early American Novel* (Chicago: University of Chicago Press, 1997). 他者の痛みに共感する「感性」を重視する時代的潮流は、見せ物としての他者の苦しみ (spectacle of suffering) に対する人々の欲求を高め、残酷な暴力への覗き見趣味的な執着を生み出した。Halttunen, "Humanitarianism and the Pornography of Pain"; 326-27.

当時「感性」が重視されるようになった背景には、18世紀に進行した社会的権威の相対化や商業化の趨勢が個人と社会の関係を変容させつつあったことを指摘できる。特に、独立革命を経たアメリカ社会では、それまで個人と個人を結び合わせていた家父長的紐帯にかわって、平等な個人をつなぐ水平的な結びつきが求められていた。¹⁶⁾ 身分や教育水準に関わらず、全ての人に生来的に備わっているとされた共感能力「感性」は、市民社会を結び合わせる社会的紐帯として重視されるようになったのである。¹⁷⁾

本稿は、凄惨な暴力の実態を鮮烈に印象づけたサンドマング難民の到来が、アメリカ社会において、当時の小説と同様に「感性」を揺さぶるドラマとして人々の心を惹き付けたことに着目する。当時の新聞は、家族や財産を失い、異国の地で困窮する難民の様子を感傷的に描き出し、彼らに対する同情を掻き立てた。紙面上で第一次政党制の成立へと連なる対立が表面化しつつあった時代、¹⁸⁾ 難民に対する同情が異なる党派の新聞の間でも広く共有されていたことは特筆に値する。¹⁹⁾ こうした同情の共有と全国的な支援活動の拡大は、「感性」豊かな市民としての自負を満たし、多様な住民の間に「徳高い共同体」としての連帯感を生み出す効果をもたらした。

先行研究は、サンドマング白人層に対するアメリカ社会の共感を、奴隷制社会ゆえの「白人への肩入れ」として当然視してきた。しかしながら、後述するようにサンドマング白人層は奴隷蜂起勃発以降も、難民として流入するまで否定的なイメージを付与されてきた。従って、彼らが惨劇の「被害者」として犠牲者化された経緯は、蜂起した黒人に対するアメリカ社会の人種的忌避のみによっては説明できない。本稿は、「感性」に基づいた白人難民に対する同情と支援活動の拡大が、奴隷蜂起そのものをセンセーショナルな「惨劇」としてドラマ化し、結果的に蜂起した奴隷に正当性を与える議論を封じ込めてしまったことを検討する。

本稿では以下、三つの問いを検討していく。第一に、白人難民はどのようにして惨劇の被害者として犠牲者化されていったか、第二に、難民に対する支援はどのように呼びかけられ、支援活動はどのような形態で行われたのか、第三に、白人難民に対する支援活動は、フランス政府からの圧力を受けながらどのようにして維持されたのか。最後に全体を総括した考察を述べる。

¹⁶⁾ Jay Fliegelman, *Prodigals and Pilgrims: the American Revolution against Patriarchal Authority, 1750-1800* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984); Gordon S. Wood, *The Radicalism of American Revolution* (New York: Vintage Books, 1993), 213-25; Elizabeth Barnes, *States of Sympathy: Seduction and Democracy in the American Novel* (New York: Columbia University Press, 1997), chap.1.

¹⁷⁾ Knott, *Sensibility and the American Revolution*, 194-201; Barnes, *States of Sympathy*, chap.1.

¹⁸⁾ Jeffrey L. Pasley, "The Tyranny of Printers": *Newspaper Politics in the Early American Republic* (Charlottesville: University Press of Virginia, 2001), chap.3.

¹⁹⁾ 例えば、当時連邦派を代表していた『ガゼット・オブ・ザ・ユナイテッド・ステイツ』と共和派を代表していた『ナショナル・ガゼット』は、ほぼ同じ時期にサンドマング難民への同情と支援活動の拡大を是認する記事を掲載している。*Gazette of the United State* (Philadelphia), July 24, 1793; *National Gazette* (Philadelphia), July 27, 1793.

1. サンドマング白人層の犠牲者化

(1) カップフランセの大火：事件の発端

1793年夏、合衆国の諸都市にサンドマングから大量の難民が流入した。ここでは彼らが故郷を追われることになった経緯を、簡単に説明しておきたい。

第一に、1791年奴隷蜂起が発生して以来、サンドマングの情勢は泥沼化の一途を辿り、白人・有色自由人・黒人奴隷の間で相互に熾烈な人種間抗争が繰り返されていた。

第二に、フランスの本国議会とサンドマング白人層の間で、有色自由人の権利をめぐる深刻な対立が起きていた。92年4月、本国議会は有色自由人に白人と対等の権利を認める法令を定めた。奴隷蜂起を鎮圧するために、有色自由人の協力を得ることが不可欠と考えられたからである。²⁰⁾ この法令を施行するために、本国から三名の政府代表委員が派遣された。彼らは、従来の人種秩序を維持しようとする現地の白人層と激しく対立した。

第三に、1793年2月に勃発したフランス革命戦争が、西インド植民地にも波紋を広げていた。サンドマングは、イギリスやスペインによって侵略される脅威にさらされた。しかしながら、現地の白人層の一部はフランス政府が推進する人種秩序の改変を避けるため、むしろ他国の侵略を誘致しようとした。²¹⁾ こうした陰謀の発覚は、フランス政府とサンドマング白人層の対立を一層激化させた。

このような経緯を経た93年6月、サンドマングの首都カップフランセにおいて政府代表委員と白人層の間で武力衝突が勃発した。混乱の渦中でカップフランセは大火災に見舞われ、窮地に追い込まれた政府代表委員は、黒人奴隷に対し委員への協力と引きかえに市民権を与えることを宣言した。それがサンドマングにおける事実上の奴隷解放宣言となった。勢いを得た黒人と白人、および有色自由人の戦いは凄惨を極めた。²²⁾ こうした混乱を逃れて、93年夏、数多くの住民がサンドマングを後にし、合衆国へと流入した。

(2) アメリカ合衆国におけるサンドマング白人層への評価

難民を迎えたアメリカ社会では、彼らに対する同情が広く共有され、大規模な支援活動が展開された。しかしながら、サンドマング白人層ははじめから「惨劇の被害者」として同情を集めてきたわけではない。ここでは、91年の奴隷蜂起発生から93年のカップフランセ火災までの間、合衆国で白人層に対する厳しい批判が共有されていたことを強調しておきたい。

第一に、サンドマングにおける奴隷蜂起の原因を、西インド特有の極度に残酷な奴隷制のあり方に帰す議論が広く共有されていた。植民地時代からアメリカ社会は、西インドに

²⁰⁾ 浜忠雄『ハイチ革命とフランス革命』(北海道大学図書刊行会、1998年)、116-17頁。

²¹⁾ Laurent Dubois, *Avengers of the New World: the Story of the Haitian Revolution* (Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 2004), 153.

²²⁾ Jeremy D. Popkin, *You are All Free: the Haitian Revolution and the Abolition of Slavery* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010); Dubois, *Avengers of the New World*, chap.7; Robert Louis Stein, *Léger Félicité Sonthonax: the Lost Sentinel of the Republic* (London: Associated University Press, 1985).

おける奴隷制が合衆国の奴隷制よりも過酷であるという意見を培ってきた。²³⁾ 西インドの奴隷制に対する批判は奴隷州の新聞にも掲載され、逃亡奴隷の搜索協力願いや奴隷販売の広告と隣り合わせて掲載されることもあった。²⁴⁾ 西インドの奴隷制に対する批判は、「善い制度」(benign institution) としての合衆国の奴隷制を対比的に正当化する役割を果たしていた。²⁵⁾ フィラデルフィアの『ナショナル・ガゼット』のように、サンドマン島の奴隷蜂起を「他に並ぶもののない、白人たちの…専制と残忍さ (tyrannies and cruelties)」に帰す議論は、「人道的な」奴隷制を有する合衆国が、同様の惨禍から免れることを暗示するものであった。²⁶⁾

第二に、奴隷蜂起が長期化するにつれて、混乱の収束を導くことのできない現地の白人層に批判が高まった。新聞上では、危機に瀕してもなお政治的膠着状態を脱せず、軍事作戦の低迷をもたらしていた植民地議会に対して厳しい糾弾がなされている。²⁷⁾ サンドマン島の治安回復に強い利害を持っていた商人たちは、現地の白人層の無力さに苛立ちを募らせていた。²⁸⁾

さらに重要なことは、同時期フランス議会で加熱していたサンドマン島白人層への批判が、合衆国にも共有されていたことである。²⁹⁾ なかでも、93年春に着任したフランス代理公使 E. C. ジュネ (Edmond Charles Genet) は、アメリカ社会にサンドマン島白人層への不信を広める上で、主導的な役割を果たした。例えば93年6月には、サンドマン島政府代表委員

²³⁾ Ashli White, *Encountering Revolution: Haiti and the Making of the Early Republic* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2010), 126. 西インド植民地における奴隷制の残酷さは、合衆国において人々の好奇の対象となり、小説や旅行記においても欠かせないテーマの一つとなった。そのような旅行記の例として、Baron de Winpffen, “A Voyage to Saint Domingo, in the Years 1788, 1789, and 1790” in Leonora Sansay, *Secret History and Laura or the Horrors of St. Domingo*, ed. Michael Drexler (Orchard Park: Broadview Press, 2007), 270-71. 以下の地誌「サンドミンゴのクレオールの性質」においても、奴隷に対する女性主人の残忍さや、子どもの横柄さが批判的に描かれている。Moreau de Saint-Méry, “Character of the Creoles of St. Domingo,” *American Museum* (November, 1789): 359-61, 456-69.

²⁴⁾ 例として、*Baltimore Evening Post*, July 27, 1792.

²⁵⁾ 奴隷制度を家父長的な「善い制度」として正当化する言説については、Eugene D. Genovese, *Roll, Jordan, Roll: the World the Slaves Made* (New York: Pantheon Books, 1972), esp. 3-7. なお、モロ・ド・サン＝メリは、合衆国滞在中の手記の中で、「フランス領植民地 [サンドマン島] を悲劇が襲って以来、フランスではアメリカ人の奴隷に対する態度が賞賛されるようになった」と述べている。Moreau de Saint-Méry, *Moreau de St. Méry's American Journey, 1793-1798*, trans. and eds. Kenneth Roberts, Anna M. Roberts (New York: Doubleday, 1947), 303.

²⁶⁾ *National Gazette* (Philadelphia), July 31, 1793; White, *Encountering Revolution*, 126-38.

²⁷⁾ *National Gazette* (Philadelphia), May 7, 1791; *New York Journal*, June 27, 1792.

²⁸⁾ White, *Encountering Revolution*, 54; James Alexander Dun, “What Avenues of Commerce, Will You, Americans, Not Explore!: Commercial Philadelphia’s Vantage onto the Early Haitian Revolution,” *William and Mary Quarterly* 62, no. 3 (2005): 484-85.

²⁹⁾ 例えば以下の記事は、国民議会でサンドマン島の白人層が有色自由人との協力を拒否したことを糾弾した議員の発言を紹介している。*New York Journal*, May 23, 1792. また、1792年2月立法議会で読み上げられた以下の報告書は、奴隷蜂起の原因を白人層の陰謀と人種の偏見に帰している。この報告書は直ちに翻訳され、フィラデルフィアで出版された。*An Inquiry into the Causes of the Insurrection of the Island of St. Domingo, to Which are Added, Observations of M. Garran-Coulon on the Same Subject* (Philadelphia: Joseph Crukshank, 1792).

からジュネに送られた手紙が合衆国各地の新聞に掲載され、人々に衝撃を与えた。その手紙は、現地の白人層が企てた陰謀によってサンドマングがイギリスに侵略されかけたことを「共和国の友」である合衆国市民に報告する内容であった。³⁰⁾ こうした糾弾は、親仏感情の強かった当時のアメリカ社会において、深刻に受け止められた。

このように、93年の夏に先立つ時期において、アメリカ社会ではサンドマング白人層に対する批判が広く共有されていた。

(3) 難民の流入と犠牲者化

しかしながら、こうした批判は93年7月サンドマングから合衆国諸都市に難民が流入したことを機に、急速に退潮していく。例として、93年8月チャールストンの新聞に掲載された記事を見てみよう。

[サンドマングの] 人々が置かれている嘆かわしい状況は、全ての人の多感な心を最も痛々しい思いに満たす。… 何千もの勇敢で誠実な男性が、おそらくは徳高く愛らしい女性たちが、そして彼らの可愛らしく無垢な子どもたちが、無情なる墓に差し出されているのだ。その墓は大きく開いて底知れぬ深淵をのぞかせ、辺りをとりまく血なまぐさい破壊と激しい苦悶をよそに、静かに彼らの手足を飲み込む。³¹⁾

白人たちを飲み込む墓のメタファーによって、この記事が描くサンドマングの情景はゴシック小説の一場面のようにおどろおどろしく歪められている。白人たちは惨劇の被害者であるがゆえに批判を免れ、肯定的な形容を受けている。この記事に見られるように、サンドマングの惨状が知れ渡ると同時に、これまで様々な批判を受けてきた白人層は無実の被害者として捉え直されていった。サンドマングの出来事は次第に政治的、歴史的文脈から切り離され、荒れ狂う怪物と無力な主人公たちによる一種のドラマに仕立て上げられていった。³²⁾

サンドマング白人層の犠牲者化は、以下の二つの効果をもたらした。

第一に、サンドマングの奴隷蜂起が「惨劇」としてドラマ化されたことで、奴隷の蜂起に正当性を見いだそうとする議論³³⁾が封じ込められていった。フィラデルフィアの奴隷

³⁰⁾ *New York Journal*, June 8, 1793; *Columbian Centinel* (Boston), June 15, 1793.

³¹⁾ *Columbian Herald or the Southern Star* (Charleston), August 13, 1793. 同年7月18日にボストンの新聞(新聞名不詳)が掲載した記事を転載したもの。

³²⁾ サンドマングの奴隷蜂起は1793年以降、文芸作品にも好んで用いられ、ドラマティックな惨劇として描き出された。例えば、ニューヨークで活動した作家R. B. デイヴィスの詩「サンドマングの惨劇」(1794)は、その好例である。Richard Bingham Davis, “Le Malheureux de St. Dominique,” in *Amazing Grace: an Anthology of Poems about Slavery, 1660-1810*, ed. James G. Basker (New Haven: Yale University Press, 2002), 484-85.

³³⁾ 例えば、コネティカット州の奴隷制廃止論者A. ピショップは、「私たちが先の輝かしい[独立]革命を正当化し得るなら、私たちと同じように大義のために勇気をもって立ち上がった彼ら[サンドマングの黒人奴隷]の行いも正当化すべきではないか」と問いかけた。Abraham Bishop, “Rights of Black Men,” *The American Museum* (November, 1792). その他の例として、Theodore Dwight, “An Oration: Spoken before the Connecticut Society, for the Promotion of Freedom and the Relief of Persons Unlawfully Holden in Bondage” (Hartford: Hudson and Goodwin, 1794).

制廃止論者J.マードック (John Murdock) が著した戯曲『愛の勝利：幸福なる和解』(1794) は、この効果を顕著に表している。³⁴⁾ この戯曲は、奴隷制に反対する立場に立つ主人公が、サンドマングからやってきた難民女性と出会い、結婚する物語である。物語の前半では奴隷制の罪悪に関する議論に焦点が当てられ、奴隷の苦しみに共感する主人公の感性が綴られているが、主人公が難民女性に出会う場面の後は、物語の焦点は女性の窮状に対する共感と施しの美徳に集約されていく。女性を窮地に陥れたのが奴隷蜂起であることや、奴隷が蜂起に至った背景は全く問題にならない。この戯曲に象徴されているように、合衆国において人々の関心が難民の惨状に集約されていった結果、サンドマングの奴隷蜂起から奴隷制そのものの是非を問う視点は失われていった。

第二に、サンドマングからやってきた難民の惨状を前にして、アメリカ社会の彼らに対する対応は、政治・外交の次元の問題から「感性」の次元の問題へと置き換えられた。例えば、親仏家として知られた国務長官T. ジェファソン (Thomas Jefferson) は、サンドマング白人層への深い疑惑を抱いていたが、難民の惨状に同情し、以下のように述べている。「サンドマングから逃れてきた人々は貴族主義者 (aristocrat) であるけれども、彼らの状況は、切に哀れみと慈善の精神を誘う。人間の感情にこれほど訴えてくる悲劇は他に例がない。」³⁵⁾ また、当時ジュネに対して最も親和的な論調で知られていた『ナショナル・ガゼット』も、「難民の中には自ら災いを招いた者もいるが、彼らは総じて不運でありその悲痛な状況が喚起する感情はただ哀れみのみである」と述べて、難民への同情を掻き立てている。³⁶⁾ 人々の「感性」を揺さぶる難民の惨状に対し、人々の共感は広く共有され、彼らに対する大規模な支援活動が展開されていった。

第二節では、サンドマング難民に対する支援がどのように展開されたのか、その担い手や支援の動機、具体的な支援の方法について検討していく。

2. アメリカ諸都市における支援活動の実態

(1) 商人同士のネットワーク

第一に、サンドマングと交易を行っていた合衆国の商人は、政府代表委員と対立し後ろ盾を失った白人層に対して貴重な援助を行った。例えば、カップフランセに停泊していたアメリカ商船の多くが、大火災に際して避難しようとする難民を無償で迎え入れた。さらに、フィラデルフィアのS. ジラード (Stephen Girard) のように、サンドマングとの交易に携わっていた富裕層は、難民の個人的な求めに応じて積極的に経済的支援を行った。³⁷⁾

個人的な支援に加え、商人は地域の支援活動にも積極的に参画した。93年夏以降、各地で難民支援のための委員会が結成された。そこでは、住民の投票によって選出された委

³⁴⁾ John Murdock, *The Triumphs of Love; or Happy Reconciliation* (Philadelphia: R. Folwell, 1795).

³⁵⁾ Jefferson to James Monroe, July 14, 1793, in *The Papers of Thomas Jefferson*, ed. Julian P. Boyd, et al. (Princeton: Princeton University Press, 1950) 26, 503.

³⁶⁾ *National Gazette* (Philadelphia), July 27, 1793.

³⁷⁾ Ashli White, "A Flood of Impure Lava: Saint Dominguan Refugees in the United States, 1791-1820" (PhD. diss., Columbia University, 2003), 100-110.

員が、募金と義援金の供出を監督した。³⁸⁾ これらの委員の多くを占めたのが、サンドマングと交易を行っていた商人であった。彼らの活動の背景に、サンドマング白人層と密接なパートナーシップを構築しておこうとする目的があったことは否定できない。

(2) 地域住民による支援活動

ただし、難民に対する支援活動には商人だけではなく幅広い層の住民が参加した。住民による支援は、義援金や物品の供出、家庭での難民の受け入れなど、様々な形態で行われた。³⁹⁾ また、義援金を集めるためのイベントも企画され、演劇やコンサートの収益が寄付にあてられた。⁴⁰⁾ 注目すべきことに、ボルティモアで行われた劇の上演に際しては「慈善活動の対象である不幸な人々に対する同情は喜ばしいことに全ての階層に行き渡っている」ことを考慮し、チケットの料金を一律制にするという取り計らいがなされている。⁴¹⁾ この計らいからは、支援活動においてより多くの義援金を集めることよりも、より多くの市民が参加できることが重視されていたことがわかる。

このように幅広い層の住民が参加した支援活動は、どのように呼びかけられたのだろうか。

第一に、難民への支援は、各市民のアメリカ人としての愛国心を刺激する形で喚起された。例えば、フィラデルフィアのある新聞では「人類の避難所 (asylum of mankind)」という独立革命以来のアメリカ像⁴²⁾ が援用され、合衆国の市民であることは、恵まれない人々に奉仕する慈愛の精神を要求する、という主張がなされている。⁴³⁾ さらに、各地で展開された支援活動は、しばしば公共善に奉仕する市民としての自負をかけた競争の様相を呈した。例えば、チャールストンの新聞は「慈善の精神を発揮したことで褒め称えられている」ボルティモアの女性たちに負けないように「尊い奉仕」に携わろう、と呼びかける女性の手記を掲載している。⁴⁴⁾ この手記によると、彼女を奉仕へと駆り立てているのは「感性」や「親切で優しい思い」であり、特定の立場にある人々に課される責任ではない。このように、難民に奉仕することは、喜びを伴う自発的な活動として呼びかけられた。各地で行われた支援活動の様子を伝える記事は遠隔地の新聞にも転載され、豊かな「感性」と寛大さを示した合衆国市民の例外的な道徳的卓越性が強調されていった。⁴⁵⁾ このように、各地での難民に対する支援活動は、新聞を介して共有され、地域を超えた愛国的感情 (patriotic

³⁸⁾ *Columbian Herald* (Charleston), July 30, 1793; *New York Journal*, August 3, 1793; *Baltimore Evening Post*, September 18, 1793.

³⁹⁾ *Virginia Chronicle* (Norfolk), August 3, 1793; *Columbian Herald* (Charleston), October 1, 1793.

⁴⁰⁾ *Dunlap's American Daily Advertiser* (Philadelphia), August 9, 1793.

⁴¹⁾ *Baltimore Evening Post*, July 18, 1793.

⁴²⁾ 『コモン・センス』の以下の一節はよく知られている。「おお! 亡命者を受け入れよ。そしてただちに人類のために避難所を設けよ。」トーマス・ペイン著『コモン・センス 他三篇』(小松春雄訳、岩波書店、1976年)、68頁。「人類の避難所」という自画像がアメリカ史において果たしてきた役割について Marilyn C. Baseler, “Asylum for Mankind”: *America, 1607-1800* (Ithaca: Cornell University Press, 1998).

⁴³⁾ *Dunlap's American Daily Advertiser* (Philadelphia), July 9, 1793.

⁴⁴⁾ *Columbian Herald* (Charleston), September 10, 1793.

⁴⁵⁾ *Baltimore Evening Post*, July 19, 1793; *Dunlap's American Daily Advertiser* (Philadelphia), July 20, 1793; *Columbian Centinel* (Boston), July 27, 1793.

sentiment) を醸成するのに寄与した。⁴⁶⁾ サンドマング難民に対する支援は、合衆国市民としての徳を発揮する機会として言及され、結果的に多くの市民の協力を引き出した。

(3) 公的資金による支援

サンドマング難民に対する支援の形態として、最後に挙げられるのは公的支援である。

公的支援は、①州政府による支援 ②連邦政府による支援 ③フランス政府による支援の三つに区分することができる。

はじめに、州および連邦政府による支援について簡単に述べる。上記のとおり、93年夏以降、各地で市民による自発的な支援活動が積極的に展開されていた。しかしながら、難民の滞在が長期化する中で各地の委員会は緊急的に集められた義援金を使い果たし、州や連邦政府による補助を必要とするようになった。こうした求めに応じて、93年末頃から各州議会や連邦議会で公的資金による義援金供出の是非が議論され始めた。この点については、第三節で詳述する。

さらに、難民は代理公使による支援を期待した。彼らは、ジュネが①本国政府に彼らの窮状を報告し、支援要請を行う ②出国許可など、帰郷に必要な手続きを行う ③合衆国政府/市民に対して支援を要請することなどを期待した。しかしながら、ジュネはそのいずれに対しても消極的であった。第三節では、ジュネとサンドマング難民の対立を背景に、合衆国において難民に対する公的義援金が供出された経緯を分析する。

3. サンドマング難民の支援をめぐる米仏間の軋轢

(1) ジュネとサンドマング難民の対立

1793年春からフランス代理公使を務めたジュネは、初期共和国時代の政治、社会、ならびに外交に多大なインパクトを与えた人物として知られる。⁴⁷⁾ しかしながら、ジュネの任務においてサンドマング難民の処遇が大きな割合を占めていたことは、あまり知られていない。ジュネは、着任早々合衆国に流入した大量のサンドマング難民と対峙し、その任期を通じて彼らの存在に頭を悩ませることになった。

前述のとおり、ジュネはサンドマング白人層に対し一貫して敵対的な態度を示した。彼は着任当初から、サンドマング政府代表委員を通して彼らによる陰謀の顛末を報告されており、フランス共和国に対するサンドマング白人層の忠誠に疑念を抱いていた。⁴⁸⁾ ジュネは、難民が合衆国に流入した当初から、カップフランセの惨禍の原因を現地の白人層に帰

⁴⁶⁾ 初期アメリカにおいて新聞を介してナショナリズムが醸成されていく過程を論じた研究の例として、David Waldstreicher, *In the Midst of Perpetual Fetes: the Making of American Nationalism, 1776-1820* (Williamsburg: The University of North Carolina Press, 1997).

⁴⁷⁾ 歴史家のH.アモンは、ジュネが合衆国にもたらしたインパクトを以下の三点にまとめている。①対仏政策をめぐって国内世論を二極化させ、第一次政党制の成立を準備したこと ②米仏間の共和制の差異を明確にしたこと ③20世紀に至るまでアメリカ外交の基軸となった中立方針の確立を導いたこと、である。Harry Ammon, *The Genet Mission* (New York: W. W. Norton & Company, 1973).

⁴⁸⁾ Popkin, *You are All Free*, 295.

す主張を展開している。⁴⁹⁾ 93年11月ジュネは本国に向けて、難民の半分はフランス革命に敵対的であり、残りの半分も「肌の色の平等を受け入れられない」と報告し、これらの人々をサンドマングに帰すことはできない、と通告している。⁵⁰⁾

さらに、ジュネはアメリカ社会に対しても、難民に対する警戒を促した。例えば、8月4日、ジュネはジェファソンに宛てて以下のように書き送っている。「あなたに、アメリカで見いだした避難所 (l'asile) を悪用している人々のことを告発します。彼らの目的は、アメリカにおいて祖国への陰謀を新たに企てることなのです。」⁵¹⁾ 合衆国市民の支援に頼って生活する難民は、こうした非難を覆す必要に迫られた。彼らは自らの身の潔白と支援の妥当性を訴えるために積極的に行動していった。

(2) 慈善に値する貧者として

第一に、彼らは自ら新聞を出版して、サンドマング白人層にまつわる否定的なイメージの払拭やジュネによる批判への反駁を行っていった。⁵²⁾

ここでは例として、『サンドマングの革命新聞 (Journal des Révolutions de Saint Domingue)』を発行していたタンギー (Tanguy de la Boissière) が、93年8月、新聞の創刊に先立って出版した英仏二カ国語版の企画書 (proposal) を検討したい。⁵³⁾

企画書の前半では、サンドマングの歴史が顧みられ、これまで白人層がいかに本国政府によって迫害を受けてきたかが強調されている。タンギーは、サンドマングの白人層が「フランスで迫害され、涙を流しながら故郷を後にしたユグノーの末裔」であること、⁵⁴⁾ 「勤勉に働き母国に莫大な貢献をしてきた」にも関わらず「専制」によって窮乏させられてきたことなどを訴え、合衆国市民の共感を誘っている。ここには、信教の自由を求めて入植

⁴⁹⁾ Dunlap's *American Daily Advertiser* (Philadelphia), July 12, 1793; *New York Journal*, July 17, 1793.

⁵⁰⁾ Genet to the Minister of Foreign Affairs, November, 1793, cited in Frances Sergeant Childs, *French Refugee Life in the United States, 1790-1800: an American Chapter of the French Revolution* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1940), 166.

⁵¹⁾ Genet to Jefferson, August 4, 1793 in *The Papers of Thomas Jefferson*, 26, 612.

⁵²⁾ 歴史家の F. S. チャイルズは、サンドマング系難民をそれぞれ代表的な新聞の論調に基づいて二種類のグループに分類している。『クーリエ・フランセ (*Courrier Français*)』に代表される共和派は、フランス革命に親和的で、段階的な人種秩序の改変には譲歩的であるものの政府代表委員とは対立するグループである。もう一つは『クーリエ・ポリティーク (*Courrier Politique*)』並びに『クーリエ・ド・ラ・フランス・エ・デ・コロニー (*Courrier de la France et des Colonies*)』に代表される王統派で、フランス革命を支持せず、その過激化に批判的で、秩序と平和の回帰を重視するグループである。後述するタンギーについては、政府代表委員並びにジュネに批判的であったことから王統派と分類する研究 (Logan) もあるが、フランス革命の理念を支持し、人種秩序の改変にも賛同するなど進歩的側面を持った人物であったことから、無党派ないし共和派と分類する方が一般的である。Childs, *French Refugee Life*, 149-53; Logan, *The Diplomatic Relations*, 46; Jennifer J. Pierce, "Discourses of the Dispossessed: Saint-Domingue Colonists on Race, Revolution, and Empire, 1789-1825" (PhD. diss., Binghamton University, 2005), 190-91.

⁵³⁾ Tanguy de la Boissière, "Proposals, for Printing a Journal of the Revolution in the French Part of St. Domingo [Prospectus d'un Journal des Révolutions de la Partie Française de Sainte Domingue], *Révolution de St. Domingue Collection*, vol. 3, John Carter Brown Library, Providence.

⁵⁴⁾ 実際には、彼らの殆どがカトリックであり、合衆国に滞在中もその信仰を保った。White, *Encountering Revolution*, 96.

してきたピューリタンの物語や、独立革命のイデオロギーを髣髴とさせるナラティブが見いだされる。

企画書の後半では、彼らが「ただ不幸な被害者であり、不幸を生み出したのではない」ことが主張され、ジュネや政府代表委員による非難に対抗していくための媒体として『革命新聞』を発行していく決意が述べられている。このような主張が、英仏二カ国語で発行されていることは、難民やジュネのみならず、合衆国市民を読者として想定し、アメリカ社会に構築された公共圏に自らの主張を届けようとしていたことが伺われる。

他にも難民は、自らがフランス共和国の忠実な市民であることを様々な局面で強調した。例えば、王権停止を記念する8月10日、ルイ16世の処刑を記念する1月21日などには、首都フィラデルフィアにおいて自らパレードや祝典を催し「自由の理念に対する献身とフランス共和国への忠誠」を示した。⁵⁵⁾

1793年9月5日チャールストンの『シティ・ガゼット』には、サンドマンクの「犠牲者」が他の難民を代表してチャールストンの市民と支援委員会のメンバーに送った手紙が掲載されている。著者はチャールストン市民の支援活動に対する感謝と賞賛の言葉を連ねた後で、彼らに「汚名を着せる…敵の悪意」に惑わされないよう注意を促している。⁵⁶⁾

これに対しジュネも、新聞上で「難民たちの中に、不幸という覆いに隠れて人々の好意を享受している反革命派がいる」⁵⁷⁾ ことを糾弾しているが、ジュネ自身の政治的立場が危ぶまれる中で、彼の発言の影響力は次第に低下していった。⁵⁸⁾

(3) 公的資金の供出

第二節で言及したように、1793年秋には、各地の難民支援委員会が財政難に陥り、公的資金による援助を必要とするようになった。同年末になると、各州の州議会で義援金供出の是非が議論された。⁵⁹⁾

例えば、1793年11月、メリーランド州議会は、ボルティモアに集うサンドマンク難民に対する義援金の供出について討議している。ボルティモアの支援委員会の報告によると、同市にはこれまでに1200人ももの難民が集い、「筆舌尽くしがたい悲嘆」のうちにあるという。委員会の代表は、ボルティモアの市民がこれまでに12000ドルもの義援金を供出したにも関わらず、依然350人程の難民が支援を必要としていると報告している。

ボルティモアの委員会は続けて、これらの難民がメリーランド州の公的保護を受けることの正当性を以下のように説明する。第一に、サンドマンクがこれまでメリーランドに「偉大で安定的な小麦粉市場を開放し、活発で儲けの多い交易の手段を与えて」きたことが指摘される。第二に、難民が独立戦争以来の同盟国フランスの市民であること、さらに彼ら

⁵⁵⁾ “Procès Verbal de la fete du 23 Thermidor”; “Procès Verbal de la fete qui a eu lieu le 2 Pluviose,” Révolution de St. Domingue Collection, vol. 3.

⁵⁶⁾ *City Gazette & Daily Advertiser* (Charleston), September 5, 1793.

⁵⁷⁾ *Columbian Centinel* (Boston), December 7, 1793.

⁵⁸⁾ ワシントン政権がフランス政府にジュネの召還を要求する経緯については、以下に詳しい分析と史料が掲載されている。“The Recall of Edmond Charles Genet: Editorial Note,” in *The Papers of Thomas Jefferson*, 26, 685-715.

⁵⁹⁾ Hunt, *Haiti's Influence*, 42-43.

が不幸な「犠牲者」であることが強調される。討議の結果、メリーランド州は、翌月に召集される連邦議会が資金を供出するまでの間、州政府の財源から難民のために週500ドルを支出することを決議した。⁶⁰⁾

1794年1月、連邦議会の場でメリーランド州の代表S.スミス (Samuel Smith) 議員が、連邦予算による支援の供出を要求した。スミスは、サンドマングから3000人もの難民が合衆国全土に上陸し、前例のない惨状を呈していることを報告している。⁶¹⁾ ニュージャージー州選出のE.ブーディノ (Elias Boudinot) 議員は、「自然の掟、及び国家間の掟」の必然として、アメリカ人は「同盟国であり、かつての恩人でもある共和国の市民を助けるのが定め」であると発言し、早急な義援金の供出を支持した。⁶²⁾ 一方ペンシルヴェニア州のT.フィッツシモンズ (Thomas Fitzsimons) 議員は、ジュネが難民の間に区別を設けて、支援の対象とする人と、支援の対象から除外する「貴族主義者」とを分けていることに配慮を促している。⁶³⁾ これに対し、ニュージャージー州のA.クラーク (Abraham Clark) 議員は、「難民が民主主義者であろうと貴族主義者であろうと下院の知るところではない。彼らは人間であり、それだけで同情と救援の資格としては十分なのだ」と発言し、連邦議会が義援金の供出へと踏み切るきっかけを作った。⁶⁴⁾ 最終的に連邦議会は、大統領がフランスに負っている戦債から10000ドルを切りくずして各州の難民に分配すること、およびその支払いについて代理公使と交渉することを認めた。⁶⁵⁾

このように、連邦議会では苦しみのうちにある他者に対する人間の道義的責任として、義援金の供出が正当化された。その際、同盟国であるフランスに対する忠義が度々強調されているが、ジュネやサンドマング政府代表委員など、当時西半球においてフランス共和国を代表する立場にあった人物と難民の間に対立があったことは、重視されなかった。このことは、サンドマング難民に対する支援の供出が政治や外交の次元から切り離され、「感性」に基づく普遍的仁愛の表出として決議されたことを示唆する。同じことは、殊に対仏政策をめぐって既に第一次政党制の対立軸が生まれつつあった時代において、義援金の供出が党派的対立を超えて支持されていることから言える。⁶⁶⁾

しかしながら、1794年に決議された支援は、わずか2ヶ月で途絶えてしまった。その理由として、以下の三点が挙げられる。第一に、政府の当初の予測に反して、サンドマングの混乱は長期化し、難民が帰島できる見通しが立たなかったことである。第二に、フラン

⁶⁰⁾ *Votes and Proceedings of the House of Delegates of the State of Maryland. November Session, 1793* (Annapolis: Printed by Frederick Green, 1794), 18-19.

⁶¹⁾ *Abridgment of the Debates of Congress, from 1789 to 1859 vol.1*, ed. Thomas Hart Benton (New York: D. Appleton and Company, 1857), 462.

⁶²⁾ *Ibid.*, 463.

⁶³⁾ *Ibid.*

⁶⁴⁾ *Ibid.*, 474.

⁶⁵⁾ 法案成立以降、義援金は大統領から各州の支援委員会を通じて供出された。各州に対する義援金の配当について詳細は、Childs, *French Refugee Life*, 87-89.

⁶⁶⁾ 義援金の供出をめぐる議論において発言をしている議員に関する詳しい情報は、以下を参照のこと。*Biographical Directory of the United States Congress* (Alexandria: CQ Staff Directories Inc., 1997), s.vv. "Elias Boudinot," "Thomas Fitzsimons," "Abraham Clark," "Samuel Smith."

スで続く政変に対して懸念を抱いていた財務長官A.ハミルトン (Alexander Hamilton) が、供出した義援金が戦債の返済として認められなくなるのではないかという不安を深めていたことが挙げられる。⁶⁷⁾ さらにその後、黄熱病の流行、バーバリー海岸で拿捕された船員のための身代金の募金など、人々が関心を持つ慈善の対象が次々と移り変わり、サンドマング難民に対する関心が薄らいでいったことも指摘されている。⁶⁸⁾

結果的に、政府による難民の支援は決して十分ではなく、難民は再び私的な寄付に支えられて生活することを余儀なくされた。⁶⁹⁾ その上、94年以降ジェイ条約の締結などを経て米仏関係が決定的に悪化していく中で、サンドマング難民に対する支援は減少の一途を辿っていった。支援活動への熱狂の最中でチャールストンの市民が言及したように、難民に対する同情と奉仕はある種の「流行」の域に留まっていたと言うべきだろう。⁷⁰⁾

おわりに

本稿では、18世紀後半アメリカ社会で重視されるようになった「感性」の働きに注目しながら、1793年アメリカ合衆国の諸都市で展開されたサンドマング難民に対する支援活動を考察した。その結果、以下の三点が明らかになった。

第一に、奴隷蜂起や難民の惨状について書かれた出版物は、残酷な惨劇についてのセンセーショナルな読み物として関心を集めた。難民の窮状に同情し、手を差し伸べる「感性」の顕示が賞賛される中で、それまで共有されてきたサンドマング白人層への批判的視点は失われていった。

第二に、難民の惨状に対する同情と支援活動への参加は、合衆国市民の愛国心を刺激する形で呼びかけられ、多くの住人の協力を引き出した。

第三に、白人難民とフランス政府の間には対立が生じていたが、連邦政府や州政府が公的義援金を供出する際にその対立は重視されなかった。公的義援金の供出は、困窮する者に対する人間の道義的責任として正当化された。

このように、サンドマング難民の惨状は、他者の痛みに共感する「感性」を高く評価する社会において人々の関心を集め、ある種の流行として活発な支援活動の展開をもたらした。しかしながら、白人難民が惨劇の被害者として犠牲者化されていく中で、蜂起へと至った奴隷の境遇や、奴隷制そのものの正当性を問う問題意識は封じ込められていった。本稿は、アメリカ社会において奴隷蜂起の革命的意義が隠蔽されていった背景に、商業的利益や人種秩序の維持という明確な目的に基づく人々の作為だけでは説明できない、「感性」の複雑な作用が働いていたことを明らかにした。

⁶⁷⁾ Enclosure, November 23, 1793 in *The Papers of Alexander Hamilton*, ed. Harold C. Syrett, (New York: Columbia University Press, 1961-87) 15, 407.

⁶⁸⁾ White, “Impure Lava,” 112-13.

⁶⁹⁾ 1794年3月、連邦政府による義援金が途絶えた頃、ボルティモアの委員会の代表は活動資金が枯渇していることを訴えている。*Baltimore Daily Intelligencer*, March 11, 1794.

⁷⁰⁾ 「全ての不必要な贅沢と余計な装飾を慈善の神殿へと捧げます。儉約することを流行にいたしましょう。尊い奉仕に携わることを喜びといたしましょう。」*Columbian Herald* (Charleston), September 10, 1793.